



大河信濃川の分岐点。
左手が分水可動堰。右手は本流の洗堰。
萬にまさる業や心の花かざり (句佛)



国上山を背景に白鷺の舞う豊作の田圃。
数台のコンバインが唸りをあげて、次々に稲を刈り取
てゆく。



すっかり姿を消した稲架場であるが、これは自家米用か。
野積地区や吉の一部に僅かに残る。(野積にて)



月刊 第 590 号

町内祭りから

秋彼岸へ

何となくさわさわとした感じ
が夏にはある。年代的なこと
も関わっているのであろが、
終戦を境とした前後の混乱の時
代のイメージがどうしても重
なってくるようである。勿論他
の季節もあつたわけでもしる物
の無い時代裸で過ごせる季節は
有難い季節であり夏は野菜も豊
富で海の幸もその気になれば子
供でも少しは手に入れることが
出来るわけである。勿論他

である筈なのだが、どうも夏が
来ると落着けないのである。
海が観光の最大資源である寺
泊にとってはかけがえのない季
節で町は活気づき海水浴の客と
は別に各家々でもお客さんを迎
えて賑やかな日々を過ごすのだ
が、お盆が過ぎて次第に人影も
まばらになりはじめるると一寸淋
しい気持もするもの、ほっと
した気分になる。
今年には戦後六十年と言うこと
でNHKテレビでは「終戦前後
の思い出」の特集が放映されて
いる。出演者が語る一つ一つが
身に沁みて当時小学校三年だつ
た自分の思い出が呼びさまされ
てくる。今年も八月十五日には
正午に梵鐘を撞いてしばし瞑目

の時を過ごした。突然の衆議院
解散九月十一日の選挙に向つて
騒然とした雰囲気の中ではあつ
たが平和であることの有難さや
勿体ないの心を忘れかけている
自分の生き方に愕然とするひと
時でもあつた。
心配した十六号台風も遠く佐
渡沖を足早やに通過してくれた
ので当町はさしたる被害もなく
済んだが、一時はかつて死者も
出た第二室戸台風と似たコース
になるのではないかと心配し
た。昨年からの一連の災害の後
だけに被害を蒙つた地域の方々
の苦勞は察するに余りある。
幸い今年の稲作は平年並み以
上の出来のようである。連休月間と相
俟つて農村部ではコンバインが

大活躍、秋天下稔りの秋が展開
している。国上山弥彦山の濃い
緑を背景に広がる黄金色の田圃
はまさに米所越後の面目躍如と
言うところ。間もなく親戚から
の新米も届くことであろう。
「あつたけマンマにトトかけ
て」の言葉もあるが浜の魚市場
には地のノドグロはじめ秋の魚
が並び初めて団体の観光バスも
弥彦の菊祭へ向つて日毎に増え
てゆくようである。
九月の節句には町内祭りが催
され町内には上の金山神社から
港町の越後稲荷神社まで九つの
神社があり夫々各町内で維持さ
れ春と秋の節句に祭りがある。
残念乍ら白岩の諏訪十二神社は
六月に火災で焼失、再建が願わ



コンバインの普及で稲むらが残らず、畳屋等わらを必要とする業者は、特別に手刈を頼んでわらを確保。これも珍らしい風景。



この地は本間精一郎生誕の地。役場、農協と転用を経て長岡市への合併を前に急拠整備された。



各町内に神社がある。秋の節句、町内祭り。一区は八幡神社。賽銭箱に奉納カネ五、三上造船所のなつかしい文字。

れている。
海の色は夏の青から少し緑色を帯びた秋の色へと変わり、今日が一番美しい季節ではないでしょうか。落日の光に縁どられた雲は様々に変化しその雲の隙間から放たれる陽気は家々のガラス窓を炎の色に燃えつくし港に繋がれた釣船の集魚灯を一勢に染めあげてゆきます。暮れなずむ佐渡が消えかかると里山に月が昇ります。今年の十五夜は雲に見えかくれしてむしろ風情のある月でした。そして彼岸を迎えております。近頃は花に寄せる思いが強くお墓にも感心する程美しい花が沢山に供えられ、遠くからの墓参の方もぼつぼつ見えておられます。

「幸丸」の思い出

さとうのぶひと
かつて寺泊港に「おんまさ」と呼ばれる突堤がありました。片町で食堂を営んでいた「さくらや」さんの裏から沖に伸びていて、別名「さんばし」とも呼ばれていました。「さんばし」とは「棧橋」、佐渡汽船就航後の新しい呼び名です。「おんまさ」は「おうませ」、つまり「王潤瀬」の訛ったものです。「潤」は、湾または海岸の船着場を指します。寺泊港には二つの潤がありました。王潤はもと「大潤」、下の潤と比べ「大きい潤」という意味で、それが順徳上皇船出の港、すな

わち「王の潤」という表記に転じたものと言われています。したがって「おんまさ」という呼び名は、突堤が出来るずっと前、歴史的にかなり遡るものと思われまふ。
この「おんまさ」の先端に、高さ三メートル余り、黒光りしたカギ型の鉄の塊が屹立していました。幕末戊辰戦争時の幕軍輸送艦「順動丸」の外輪車シャフトです。順動丸は慶応四年(1868)五月、寺泊港外で碇泊していたところを薩長二隻の砲艦に挟撃され、上片町の浅瀬に乗り上げて自爆したと伝えられています。

青柳清作著「寺泊の歴史」(寺泊町公民館発行、1961)の表紙絵が、この「おんまさ」の先端、順動丸のシャフトです。これを描いたのは片町の指田写真館、指田孝平氏です。すでに灯台と「よこせ」の防波堤があったはずですが、それを大胆に省いて遠くの鳥影に吸収し、順動丸のシャフトとそれに絡みつく太い鎖で寺泊港を象徴しています。当時の表紙デザインとしては傑作と言えるのではないのでしょうか。

度重なる築港で「おんまさ」は消えました。「おんまさ」という言葉も、もはや風前の灯火、はるか記憶の彼方です。しかし順動丸のシャフトは、水族博物館の駐車場に展示されています。寺泊沖で、戊辰戦争有数の海戦があった史実を裏付ける資料として、今後も受け継がれていくことでしょう。併せて順動丸のミニチュア模型がほしいものです。順動丸は1861年、英国製。鉄船、汽船の外輪船。排水量405トン。イギリスに設計図など残っていないものでしょうか。
船と言えば、越後寺泊港で忘れられない一艘があります。かつて「おんまさ」の付け根の片町海岸から、上片町を経て上荒町海岸に至るまで、岩を積み上げた防波堤が築かれていました。岩の防波堤が切れた辺りが、ちょうど「幸丸」船主「かんねみ」さんの裏口になっていました。「幸丸」は1940年



三区四区の十二神社。
その昔は花街の女性達の守り神として賑わったと言う。
狛犬も年古りて。



田町の稲荷神社。
社殿の前には守り神狐が鎮座。
初午から祭日にはアブラ揚が供えられる。



磯町の神社は愛宕さま。
春には藤祭りがあり、5月の大祭には輿が繰り出す。
初君とも由緒の神社である。

の建造、江戸時代の北前船の面影を残した寺泊港最後の和船で、三本マストの帆船でした。50年代の後半、小学生の頃で「かんねみ」さんに、マサヨシ君という仲のいい同級生がいました。そのマサヨシ君と上荒町海岸の砂場で遊んでいたら、マサヨシ君のお爺さんが裏口から出てきて、「行くか」と。お爺さんは、波打ち際に乗り上げた伝馬船を漕いで、二人を幸丸に連れていってくれました。

「よこぜ」の内海に繫留されていた幸丸は、寺泊港の中でひとときわ目立つ美しい姿の船でした。伝馬船が幸丸に接する時、「引つ込めれ、引つ込めれ、手え潰すどー」お爺さんが、子供の目に、幸丸は巨船に見えました。一度、こんな大きな船に乗ってみたい、と。夢が叶い、はしゃぐ気持ちを抑え切れませんでした。甲板の上でひとときマサヨシ君と遊んで、子供は狭いところに入るのが好きなもの。とくに興味を惹かれたのは、甲板の下の居住区です。薄暗い居住区には畳が敷かれ、天は低いけれど整頓された立派なお座敷になっていました。入口の際に大きな木の箱が取り付けてあって、マサヨシ君がその蓋を取ると、真水が満々とたたえられていました。航海に欠かせない、貴重な飲料水でした。大きくなったなら、幸丸に乗って越後海峡を航海したい、そんな夢が膨らみました。

幸丸はその後、上荒町海岸に引き揚げられ、長らく孤をかぶっていました。護岸工事が始まり付近が一変する中、出番を待ってじっと耐える孤高の老船。しかしもはや、幸丸に出番はありませんでした。最近、この幸丸の写真を目にしました。「新潟日報」7月7日付け夕刊です。佐渡市小木町の展示館に置かれた幸丸を、船の方から撮ったものです。和船であることは一目で判りますが、そばに立ったヒトと比較し、一回り小さくなったような印象を受けました。撮り方のせ

いでしよう。なつかしさと胸がいつばいになりました。同時に、幸丸が寺泊でなく、どうして小木にあるのか素朴な疑問が湧きました。フアラオの像を、わざわざルーブルや大英博物館まで見に行かなければならないエジプト人のよう。幸丸は、越後寺泊港の歴史を彩る大切な船です。どんないきさつで佐渡に渡ったのか判りませんが、もし帰れるものなら、寺泊に帰ってきてほしいと考え

| | | |
|--------|--------|------|
| 茅ヶ崎市 | 家老 淳子 | 金三千元 |
| 豊橋市 | 長谷川 照子 | 金三千元 |
| 横濱市 | 関本 隆 | 金三千元 |
| さいたま市 | 佐藤 光子 | 金三千元 |
| 三條市 | 関本 清 | 金三千元 |
| 長岡市 | 旭 ヨシ子 | 金三千元 |
| 新潟市 | 柳下 忠男 | 金三千元 |
| 佐藤 善之 | 佐藤 善之 | 金三千元 |
| 高木 辰男 | 高木 辰男 | 金三千元 |
| 平井英次郎 | 平井英次郎 | 金三千元 |
| 高田 紀男 | 高田 紀男 | 金三千元 |
| 外山 哲夫 | 外山 哲夫 | 金三千元 |
| 中野 宏 | 中野 宏 | 金三千元 |
| 五十嵐金十郎 | 五十嵐金十郎 | 金三千元 |
| 志田 宏嗣 | 志田 宏嗣 | 金三千元 |
| 信江 誠治 | 信江 誠治 | 金三千元 |
| 住吉 一郎 | 住吉 一郎 | 金三千元 |
| 丸山 イネ | 丸山 イネ | 金三千元 |
| 阿刀 隆信 | 阿刀 隆信 | 金三千元 |

誌代御後援 (敬称略・順不同)
東京都 酔谷 進 金五千元
渡辺 賢一 金一万元
金田日出雄 金一万元
佐藤 寛子 金三千元
国立市

小波会九月句会詠草

兼題 秋めく・南瓜他当季

秋めくや

曾孫を見むと新幹線
小島 冬扇

秋めくや

先ず一筋の風に会ふ
小形 美代

夕風に

秋めく港泊り舟
能登 頑牛

臨月の

眉薄き娘や秋めく日
外山 海子

座布団に

飾られている大南瓜
水沢 蕉子



港町の越路稲荷。

この地区は分水工事の移住者が多く、神社は団結の場として大きな役割を荷負ってきた。

厨房の

地廻り然と南瓜殿

包丁を

研ぐほそそうでや栗南瓜
大越碧水子
内藤 蓮子

坊ちゃん

言う名の南瓜頂きぬ
外山きよし

暁の

虫の葬儀や蟻の列
中村 流瓢

裏木戸の

開かざるままに萩盛る
小島 温石

金色の

總波分け行く越後線
江原 汀子



初秋の砂浜でパラグライダーが舞う。

寺泊の浜風はセールに最適と言う。
ハングライダーも飛ぶ野積海岸。

星月夜

河童がねむる遠野かな

レモンテイ

トーストにジャム今朝の秋
竹内 霍山
加勢 白汀

あとがき

幸い風や雨の影響もさして受けることなく連休に合わせて刈入れの進む秋晴れの一日、信濃川沿い奥板橋下流右岸に広がる美しい芒原の夕景を紹介したいと車に乗入れたのだが途中通行止めの表示で引き返さざるを得ないこととなった。この右岸を走る道は分水洗堰の脇から途中奥板橋を突切り次で高速道路の下をくぐり抜けて長岡までの最

速の道なのだが所謂一般道路ではないので震災復旧工事では後廻しになっているよう所で所々いまだ交通止めのままになっている。庭終いと言う収穫一連の農作業もほぼ終り、この後は休耕田の大豆の収穫が済めば広大な越後平野は紅葉の季節に向い今年最後の華やきを見せる山々とは対称的にさびさびとした風景となる。かつては畦沿いに林立していた稲架木としてのタモギは機械化の進む稲作の変化にその役目を終えて姿を消し越後の象徴的風景はタモギの里を名宣る西蒲原夏井に僅かに残るのみとなってしまう。今その越後平野は自然の恵みと言う大きな仕事を終えて休養



漁協の競場は秋の魚が登土。
最右翼にはやはりノドグロをあげたい。
この日は仲々の大漁の様子。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
編集人 中村 興 樹
発行人 新潟県寺泊町
発行所 ふるさとだより
郵便番号 九四〇―一二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五
電話番号 〇二〇一九番
振替番号 〇六二〇三三五四五
印刷所 吉野印刷株式会社